

【広島】20代で病院長に就任、介護事業に着手し保育園も開設-天野純子・医療法人ハートフル理事長に聞く◆Vol.3

困難に2度の資金調達、4行共同融資でアマノ病院建設

2025年11月5日 (水)配信 m3.com地域版

2025年9月に開院した「アマノ病院」（廿日市市）を運営する医療法人ハートフルは、同年で創業120年を迎える。「天野医院」を祖とする同法人は時代の変化に合わせて柔軟にその姿を変えてきた。病院を開設してリハビリ医療に注力し、高齢化の進展と国の制度変更に伴って介護事業に着手。託児棟や保育園、放課後等デイサービスなど子ども向けの事業も展開している。「地域ニーズに応えることをずっと大切にしてきた」と話す天野純子理事長に、法人の歴史を聞いた。（2025年9月9日オンラインインタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら



天野純子氏（病院ホームページから引用）

「24時間365日医者」だった曾祖父と母を尊敬、同じ道へ

——アマノ病院が開院した2025年はちょうど、医療法人ハートフルの祖である「天野医院」が開設して120年となる節目です。

天野医院を開いた曾祖父・天野幸太郎さんは、何より地域を一番に考える人でした。「地域のことを親身に考えられる医者があるかどうかで、住民の幸せは決まるんじゃないか」。そう考え、医療にまい進しました。「地域の健康を守るには医者を増やさなくてはならない」と優秀な若者を何人も自院に迎えて育てる一方、貧しくて医療費の払えない人たちには無償で診療し、自分の母親の葬儀を出すにもお金の工面をしたといいます。こんな曾祖父の精神が、当法人に受け継がれてきた歴史があります。

——天野先生のお母さまも医師をお務めでした。先生が医師を志したのは曾祖父の存在だけでなく、お母さまの働く姿にも影響を受けたのでしょうか。

そうですね。母は医師として最高の人だったと思います。まさに「24時間365日医者」といった感じで、寝食を削って仕事に打ち込んでいました。診療時間外でも患者さんから相談があれば「診てあげるから来なさい」と言い、患

者さんの具合が悪くて来院が難しいときは往診していました。そんな母でしたから、小学生の頃に授業参観に来てもらったことはなく、また、晩御飯を作ってもらった記憶もありません。しかし、寂しい思いをしたこと以上に母への尊敬の念がありました。母に診てもらった患者さんが笑顔になり、「ありがとうございます。良くなりました」と言っていて帰っていく姿を見るにつけ、「お母さんってすごい。お医者さんは素晴らしい職業なんだ」と感じていました。

医師としてのすごさを実感したのは、私が医学部に入学した後です。医療の世界に足を踏み入れると、本当の医者になることの大変さを肌身に感じました。それは、ひとえに継続です。常に学び続けること、毎日精進していくこと。医師であっても、「ちょっと遊びたいな」とか「旅行に行きたいな」などと思う人は多いのではないのでしょうか。今で言うワークライフバランスが母にはなかったのも、それは本当にすごいなと。母は天野医院を守り続け、3年前、87歳で亡くなりました。前日まで仕事をしていたので、本人が掲げていた「死ぬまで現役」を全うしたと思います。

29歳で病院長に就任、立て続けに新規事業に着手

——お母さまが診療所で診療する一方、先生は20代で旧アマノ病院の院長に就任します。

1993年に旧アマノ病院が開院する前、曾祖父が急逝しました。既に病院の開設許可が出ていた一方、母は天野医院で診療を続けたい意向だったため、急きょ、私に白羽の矢が立ったのです。私は当時29歳で、外科医として修業中の身でした。病院長になることへの心づもりはなく、何も分からない中で経営も担うこととなりました。

——そこから、病院と法人は姿を変えていきます。リハビリに注力するようになり、2000年に介護保険制度が始まる
と介護事業に着手し、託児棟や保育園、放課後等デイサービスなど子どもを対象にした事業も始めます。

法人の変遷は、社会状況に最も影響を受けました。私自身、結婚して出産し、「子どもを抱えながらどうやって働こう」と考えたことが託児棟の開設につながり、また、待機児童の問題が大きくなったことで保育園を開設。介護保険制度が始まり、高齢の方々の生活の質をどうキープしていくかが問われるようになったため、デイサービスセンターや介護付有料老人ホームをつくりました。

全くの素人から経営を担うことになりましたが、曾祖父や母の志を受けて「社会や地域の課題にアプローチし続けていくべきではないか」と思ってきました。「今こんな社会状況だから、こんなことが必要なんだろう」といった想像が事業の端緒にあり、また、患者さんなど地域に住む人たちの声にヒントをもらったことも少なくありません。

——30年以上にわたる経営の中で、特に印象に残っている困難はどんなことですか。

2度にわたる資金調達は大変でしたね。1回目は2000年、廿日市市串戸にあった旧アマノ病院を同市陽光台に移転した時です。当時はまだ私たちの実績を銀行に認めてもらえていないところがあり、すぐには融資の許可が下りませんでした。必死に将来の展望を説明して、「お願いします！」と頭を下げたことを覚えています。

2回目は、今回の移転です。約20億円で病院を建てようと計画を立てて設計会社の合意も得ていたのですが、途中で脊椎センターの構想が立ち上がり、予算が倍に跳ね上がりました。ちょうどウクライナ戦争が始まって資材が高騰したことも影響しました。銀行には経費削減の工夫などを提案しましたがなかなか了承を得られず、この時も苦労しました。脊椎センターやコミュニティセンターのリーダーである藤本先生や大杉先生にもご協力をお願いし、部門ごとに銀行へプレゼンテーションするなどして、何とか4行の共同融資の形で資金調達ができました。

——最後に、経営者・医師としての今後の展望をお聞かせください。

ハード的な変化としては、2026年10月ごろに、健康に配慮したメニューが楽しめるカフェが病院の隣に開店する予定です。中国地方で出店している「オール薬局」と「タニタカフェ」がコラボレーションする取り組みで、当院も関わります。店舗では食事だけでなく体脂肪の測定や簡易タイプの睡眠検査などの予防医療が体験でき、当院に在籍する睡眠が専門の医師と連携する予定です。当院医師によるセミナーなども店舗で開催していく構想があり、実現すれば「地域に飛び出していく」コミュニティホスピタル化の一助になるのではないかと考えています。

法人全体としてはこれからも地域ニーズと共に変化していくことがコンセプトです。今「こうしたい」と思うことがあっても、時代や社会が変わると求められることも変わる可能性があるのも、「地域に何が最も求められている

か」にフォーカスして柔軟にプランを変えていきたいです。

そして、一人の医師としては、一生臨床医でありたいです。私は患者さんが笑顔になってくれるのがすごくうれしいので、診療をずっと続けたいですね。ライフワークとしては災害支援を行っており、熊本地震や西日本豪雨、能登半島地震などが起きた際は現地に行ってリハビリなどの面でサポートさせていただきました。「困っている人たちのために何ができるか」。医師として、法人の理事長として今後も考え続けたいです。

◆天野 純子（あまの・じゅんこ）氏

1987年東海大学医学部卒。広島大学病院第一外科、加計町国民健康保険病院外科（現安芸太田病院）を経て、1990年に曾祖父が開設した天野医院の外科に勤務。1997年医療法人フェニックス（現医療法人ハートフル）理事長に就任し、現在、アmano病院リハビリテーション部門長を兼任する。日本リハビリテーション医学会専門医など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

